

FD 関連研修会 参加報告書

主 催	京都大学高等教育研究開発推進センター
企画名称・テーマ	第 82 回京都大学高等教育研究開発推進センター公開研究会 「Deep Learning にもとづく大学教育のあり方」
開催日<会場>	2011 年 12 月 1 日 (木) <京都大学芝蘭会館別館>
参加者所属	教育学部 教育学科

参加報告

1. 研修会の趣旨

学生の Deep Learning (深い学習) を促す大学教育とはどのようなものなのか、Deep Learning 概念についての定義理解と、京都大学の Deep Learning に関連した実践報告 (2 件) を中心に、学生の学習に焦点をあてた大学教育とはどうあるべきかについて議論する。

2. 研修会の概要

14:10-15:00 学習の技法 フェレンス・マルトン氏 ヨーテボリ大学 (スウェーデン)

15:10-15:45 Active Learning を Deep Learning にするために 溝上慎一氏 京都大学

15:45-16:15 Deep Learning のための学習評価 松下佳代氏 京都大学

16:25-16:35 フェレンス・マルトン氏による実践報告 2 件に対するコメント

16:35-17:20 ディスカッション

マルトン氏が主張する Deep Learning とは、学生が主体的に個々の概念を理解し、その概念を既存の知識や経験に関連づけることができるようにすることである。つまり、学生が未来に対する準備のため、学んだことが仕事や生活に応用できるように授業者が学びを導いていくことである。このため、授業者が学生に何をねらって授業を行うのが、大事である。

学生は、論理と議論を因果的に、批判的に吟味し、理解が深まるにつれて、自分の理解のレベルを認識するようになる。また、コースの内容により積極的な関心を持つようになる。

3. 本学の FD 活動における検討課題

本学のミッションは、社会に役立つ人材の養成にある。この主旨は、Deep Learning のめざすところと合致する。しかし、まだ、学生が受け身の一斉型の授業形態が人数構成やプログラム編成、授業者の意識などによってみられる。一斉型の講義形式であったとしても、学生が自ら問う学習形式に変更していくためには、授業者の学生に対する発問のなげかけといった課題提示内容の検討と学習評価が重要である。

授業者は学生にどのような力をつけさせたいのか、何をねらって授業を行っているのか、意識することが最初の視点となる。Deep Learning では、暗記学習を否定しているのではない。学生が自分の問題として、それぞれのトピックに問題意識や知識を身につけていくことが重要なのである。社会認識力を身につけさせていくための、教員の授業意識が問われる。

本学では、非常勤講師によって大半の講義が委ねられている。司書課程においては、筆者が知りえたことはメーリングリストなどを通して、情報提供、あるいは、司書課程の範囲内における自主研修を企画することがある。しかし、これだけでは限界がある。教員の授業における意識の啓蒙の機会を、専任・非常勤に関わらず、必要である。

以上